

# 「笹川杯作文コンクール 2016-感知日本-」 ～日本語で応募～



公益財団法人日本科学協会  
業務部 国際交流チーム

# 目次

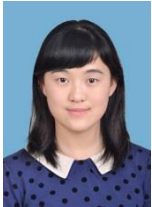
## ★「笹川杯作文コンクール 2016-感知日本-」

北京外国語大学 馮心鶴.....	2
浙江農林大学 童瑤.....	3
東華大学 吳冰潔.....	4
湖北民族学院 張孟傑.....	6
東北財經大学 王維聖.....	7
三菱商事(上海)有限公司 沈震乾.....	8
大連外国語大学 張典.....	9
青島大学 李夢双.....	11
上海理工大学 李凌翰.....	12
南京郵電大学 沈炜.....	13
華北科技大学 李雪濤.....	15
雲南民族大学 羅雯雪.....	16
天津外国語大学 徐彤.....	17
広東外語外貿大学 喻瑩.....	18
合肥学院 張玉如.....	19
大連民族大学 侯潤娟.....	20
黄岡師範学院 郭嘉玉.....	21
温州医科大学 叶璐.....	23
東華大学 戴俊男.....	24
惠州学院 吳嘉萍.....	25

## ★優勝

### 中日友好—若者の視点から—

北京外国語大学 馮心鶴



8月の頤和園。残暑の日差しの下でK君はお土産に買ったばかりの日傘式帽子を被っている。横にいる日本の男子学生三人も同じ格好をしている。まるでアイドルグループのようだ。「格好いいね」と中国の学生の誰かが明るい声をかける。「ハハハハ、本当?」「もっと面白いものを見たよ」「写真見して」。どこでも見られる仲の良い若者たちの姿だ。

今年の夏、日本語専攻の中国人大学生と中国語専攻の日本人大学生合わせて26人が自発的に交流会を催した。一週間にわたる東京会期を経て、北京会期の初日を迎える日のことであった。私もその一員として参加していた。わずか一週間という短い間で、こんなに打ち解けて話ができるようになったことを今も不思議に思う。

東京会期初日はまだお互いに遠慮深く、呼ぶときは全部「さん」づけで、語尾には「です、ます」をしっかりと飾っていた。そんな私たちに与えられたテーマは「中日両国のお互いに持つステレオタイプ」だった。丁寧に気をつかいあいながら話しあいが始まった。しかし、色々なステレオタイプが挙げられるにつれて、ここで他人事のように取り上げているステレオタイプを、自分自身も完全に脱却しているとは言えないことに気がつき始めた。

これは思わぬ発見だった。自分たちはお互いの言語を学ぶとともにその文化も国民性もよく理解しているという自負があった。だからこそ、両国がお互いに持つステレオタイプを打破しようと目標に掲げていたのだ。それなのに、そんな私たちも実はステレオタイプを捨てられずにいたのだ。反省しつつもステレオタイプは便利なものだと感心した。詳しくないことに向き合うとき、私たちはどうしてもステレオタイプというマニュアルにすがりたくなるものである。私は「日本人は外国人と距離を置きがち」というステレオタイプが植え付けられているので、細かに敬語を使った。相手も「中国人は買い物好き」と思い込んで、なるべくショッピングの時間を作ってくれた。これは、それぞれステレオタイプの指示通りに「正しい」行動を取ったといえるだろう。しかし、それだけではやがて空しく感じてくる。便利さの代わりに、一人一人の違いを知るチャンスが失われてしまい、薄っぺらい付き合いにしかならない。

そこで、私はできる限りよく見て積極的に聞いて、一人ひとりを知ろうとするようにしてみた。すると、メンバーそれぞれの個性が鮮明に見えてきた。ステレオタイプのつきあいよりずっと楽しかった。気が付けば、みんなもすでにこうしている。与えられた課題の話だけではなく、好きなアイドルは?好きなタイプは?と聞いて来たり、新しく買った本を見せてくれたりした。

会期の最終日、Cちゃんが私に、「私ってどんな人だと思う」と聞いた。その時頭の中に浮かんできたのは、「女子大生」「大和撫子」のようなレッテルではなく、一緒に経験したことであった。その経験があつて初めて、Cちゃんという個人のプロフィールを描けたのだ。

こうして、私たちは知らず知らずのうちにステレオタイプを脱却していたのである。日々積み重ねた細かな共通の経験の中でステレオタイプが融けていったので、どの時点で打ち解けたかと聞かれると、おそらく誰も答えられないだろう。

二週間という会期は短い。私たちの頭のどこかに、まだステレオタイプやステレオタイプの種が潜んでいるかもしれない。しかし、日本のメンバー一人ひとりに異なる魅力があることを知った以上、これからもステレオタイプに妨げられることなく異なる個性を持つ一人ひとりを知ろうとする努力を貫きたいと思う。

中日友好という抽象的概念の背後にも一つ一つの具体的な出来事によって積み重ねられた努力があるだろう。今回の私たちのような付き合いをした若者たちがこれまでも数知れずいたのだろう。初対面ですぐ友達になるのは難しい。しかし、相手を固まりとしてではなく、一人ひとりの人間として認め、「一緒に」何かを経験していくにつれて、親しくなれる。両国の友好に向かって、さらに多くの交流の機会が得られることを願いながら、私自身も実践していきたいと思う。また、直接交流する機会がない人たちにも、ステレオタイプに隠されて見えない部分にある面白みを知ってもらえるようにしていきたいと思う。

「土積みて山に成らば、風雨焉にて興こる。水積りて淵に成らば、蛟竜焉にて生まる」(『荀子』)とされている。細かなことからでも初めて、一人ひとりが土になり、水になり、中日友好の山と淵に寄与することを呼びかけたい。

### 「微妙」から生まれた絆

浙江農林大学 童瑤



日本に留学していた半年間、ラーメン屋でバイトをした。店で働いていたのは日中韓三国の大学生で、そこで大変楽しく忘れがたい時間を過ごした。店の人達は私が帰国する前に送別会を開いてくれた。夜の11時にスタッフ全員が鍋を囲んでお酒を飲み、盛り上がっていた時のことだ。日本人のお兄さんが「今ここにいるのは日本人七人、中国人四人、韓国人一人。もし喧嘩したら、こっちが勝てますよね。」と冗談を言った。そして「あのおさ、今中国と日本、関係いの？」と私に聞いたので、私は少し考えて「まあ、ちょっと微妙だなあ」と答えた。「中国と韓国はどう？」「そっちもね、ちょっと…」じゃ日本と韓国は？それもやっぱり微妙だよ…と笑いながら自問自答した。

今その光景を思い出すと、その時のやりとりは本当に面白かった。その原因は「微妙」という言葉に集約される。「微妙」は対象について、何とも言い表しようがないという気持ちを表す言葉だ。確かに現在、この三国の関係は一言でいうと「微妙」としかいえない。でもその夜、その小さな居酒屋で、謎めいた曖昧な関係にあるアジアの三国の若者が、一緒に飲んで、「微妙」な話題で笑って騒いだ時、私は本当に不思議だと思った。皆それぞれの国籍を背負った互いの立場をわかっている。わかっているけれど気軽に「微妙」という表現を口にして、それがまるで若者だけが知っている合言葉であるかのように笑った。

実は「微妙」という言葉はネガティブな意味ではあるけれど、対象を完全に否定せずに判断を保留したい、できれば事態が好転してほしいと願う時に使う言葉でもある。その時の雰囲気は、複雑な言葉もいらなくて、心配したり緊張したりする必要もないものだった。まだ現状はそんなに悪くない。まだ笑って乗り切る力がある。きっと乗り切れることを信じている。たとえ「微妙」だとしても、明るく前に進んでいける。みんなはそう思ったんだろう。私は何だかほっとした。

バイト先でのそのような体験を通して、何かこれまでとは違う変化が見えてきたような気がした。

私達若者の文化といえば、まず頭に浮かぶのはやはりネットである。そして私達がネットから受け取る情報は、過去の世代より何千倍も多い。そこには若者の繊細な感性だけが感じとれる日本の魅力も少なくない。また、ネットは匿名の世界だから、どんなことでも思い切っていえる。日本についてのニュースが出る度に、よく悪意のあるコメントが見られる。でも幸いなことに、好意的なコメントもいつもあって、しかも近年段々多くなってきた。戦争記念日には冷静な愛国を呼びかけ、熊本地震の時は誠実に祈り、2020年東京五輪に期待し、時々悪意のない冗談をいう…。私がバイト先で気軽に「微妙」という言葉を口に出したように、皆自

然に前向きな言葉を発信している。そうだ。変わってきている。中国人は少しずつ、日本のことをもっと知って理解したいと思うようになってきている。そしてこういう変化の先端に行くのは若者である。「微妙」という言葉の重さを捨てずに、あえてそのまま使うが、しかしその重さに拘ることもしない。それは若者の力だと思っている。どの国でも若者というものは遊ぶことが好きだ。若者が望んでいるのは、お互いを尊重した上で、海の向こうの若者と繋がりたいということだけだろう。あの夜の私達のように、丸くなって飲んで、笑って騒ぐ。いつ想像してもそれは一番いい光景だと、私はそう思っている。

中国のネットで「私がここに住んでいる理由」という中日両国に住んでいる相手国の人を取材する番組があった。そこでは色々な人の生き方が見られた。最初は皆、別に「中日友好」という壮大な理想は抱えていない。ただ自分と大切な人のため、夢を叶えるために、未知の国で精一杯頑張っている。でも気づいたらいつの間にかその国の人と心が繋がっているのだ。日本人のパワープロガー山下智博さんは、日本にいた時はパツとしなかったが、中国に来て自分が作ったネット番組が大人気になって驚いたという。「私は日本人にとって一番風当たりの厳しい所に行って、そこで自分にストレスをかけて、どういものが生まれるか見たいんです。」彼は笑ってこう言った。そうだ。「微妙」な関係にある二つの国の人が出会ったらどんな奇跡が起きるのかは、全然予想できないことである。ただ一つ信じられるのは、たとえ様々な障害があっても、そこに生の交流があれば必ず「情」が生じるということだ。それが即ち絆になる。

辞書で「微妙」を調べてみると、「細かい所に複雑で大切な意味があって、簡単に割り切ったり、言い表したりできないこと」とあった。良い部分と悪い部分が絡み合い、切り離せずに一つのものとしてある。絆というものも、そもそもこういうものではないだろうか。中日両国の「微妙」から生まれた絆を、私達若者ならではの智慧でこれからも育てていきたいと思う。

## 中日関係と情報発信

### 東華大学 吳氷潔



「このホームページ、あなたが作ったんですか？」

目の前にいるこの人は、社内で唯一の日本人、松下さんです。彼は目を丸くし、顔を赤くし、非常に感激しているようでした。私はびっくりしました。「もしかして、ホームページの内容に何か間違いでもあったのかな？」とそわそわし、緊張のあまりその場で固まってしまいました。

「あおう、どなたですか。」私は小声で恐る恐る彼に尋ねました。

「ほら、これ。」彼は携帯でホームページを指差しました。

私は画面を覗き込みました。「た、確かに、これは私が作ったページです。何か間違いがあったんですか。」私の心は落ち着かず、「どうしよう、どうしよう」と焦っていました。

すと思いあげず彼の口から「ありがとうございます。」と感謝の言葉を聞いたのです。私の緊張はすぐ驚きに変わり、「えっ」と思わず叫んでしまいました。

夏休み中、私はフランスの会社でインターンシップをしました。ある日、会社の先輩達が会社の制度や各部門の仕事内容、勤務の注意点等をどのように新入社員に簡潔に周知できるかを相談していました。

「ホームページで仕事の流れや注意点を動画の形式で説明すればどうですか。」私は上司に提案してみました。

「それはいいね。じゃ、この仕事は吳さんに任せるね。」

「はい。」

当初は中国語版のホームページしか作らなかったの、「うちの会社はグローバル企業で、外国人社員も多いから、英語版も作ってほしいな。」と上司に頼まれました。日本語学科の私は、「じゃ、日本語版も作っていいですか。」とすかさず自分の希望を伝えました。上司は社内には日本人もいるということで了承してくれました。

数日後、この中日英三か国語の「会社案内」がウェブ上にアップされました。それだけでなく、私と社内唯一の日本人との間の物語も始まりました。

「このホームページからは会社の私への配慮を初めて感じました。会社の資料やホームページはいつも中国語版、英語版、フランス語版だけです。社内にはフランス人やアメリカ人が多いので、仕方ありませんが、でも、私は日本人です。私も日本語で資料が読みたいんです。中国語の資料を読むことはできても、内心ずっと悲しい気持ちでした。自分が無視されているように疎外感を感じることもありました。でも、このホームページを見た私は今、この会社が好きでたまらなくなりました。」

松下さんの話を聞き、私は何を言えればいいかわかりませんでした。私はただ自分が日本語専攻で、日本語を使ってホームページを作りたいだけです。しかし、彼は自分への配慮だと誤解したようです。しかし、この誤解のお陰で、私と松下さんは親しくなりました。

彼はホームページ上の日本語の誤りを指摘してくれ、ホームページの修正を手伝ってくれました。

八月の末、彼は休暇を利用して日本へ帰りました。彼は一度も日本に行っていない私のために、帰省中、毎日日本の写真を私に送ってくれました。私に送ってくれたはがきには、「呉さん、もし機会があれば、是非私の家に来てくださいね。」と書かれており、日本に親戚ができたように感じました。

日本語を学んでいる私達は、必要に迫られた時だけ日本語で話すのではなく、可能な限り自分の力で自分の生活と日本を繋げるべきです。例えば、情報を発信する時、日本語を使うようにすれば、発信した情報を見た国内外の日本人に「あっ、こんなに多くの中国人が日本語を勉強しているんだ」ということに気づいてもらえます。人間は自分と共通するものがある人には好感を持つものです。情報をできるだけ日本語で発信するようにすれば、より多くの日本人に温かさや親しみを伝えられ、より多くの日本人に中国を好きになってもらえます。そうすれば、中日関係もきっとよりよいものになっていくでしょう。

九月の末、私は授業のためインターンシップを辞め、ホームページの仕事は彼に引き継ぎました。ある日、私はそのホームページ上に新しい文章が載っていることに気づきました。本文は全て日本語で、私の作成したホームページにより繋がった二人の絆のことが綴られていました。文の最後には、「これは私と彼女の物語です。呉さん、もしよかったら、卒業後会社に戻って来てください。」と記されていました。

文章を読んだ瞬間、私は非常に感激しました。初めて会社のホームページに自分に関する内容が掲載され、会社での自分の存在感を感じ、松下さんが日本語版のホームページを見た時の感激を身をもって体感できました。

「あっ、あの時の松下さんの丸い目と赤い顔、懐かしいな。」画面の前で、和やかな気持ちに包まれ、思わず笑みがこぼれました。

## 小さい風でも、海を越えられる

湖北民族学院 張 孟傑



最近、よくインターネットで日本のニュースを見ました。インターネットではみんなよく「十一区」という言い方で日本のことを指しています。名前の由来は地理的な概念で、日本は 130°E から 145°E までにありますが、世界時間帯で分ければ、十一区になっています。「日本」という公的な言い方に対してわたしは「十一区」の方が好きです。こういう呼び方は両国の距離を縮まる一方で、なんか可愛いような感じがしていますから。インターネットで探して見ると、「日本」に比べて「十一区」の方が好きな人も多いようなので、たぶんわたしと大体同じ考えを持っているかと思っていたのです。ある日、ミニブログを見ていた時、「十一区のお兄さんは中国の街道で一つの『日本人を嫌いじゃなかったら、わたしをハグしてください』と書いてある看板を挙げる」というニュースを見ていました。中国人の返事はどうなるか知りたいので、ビデオをプレーバックしました。最初の一分間には、お兄さんは一人で寂しくて街道に立っていますが、一分 15 秒になって、一人の取っ付きの男性はお兄さんを抱いてきて、次々にみんなもお兄さんを抱いて来ました。

皆さんのご存知の通り、歴史問題のせいで中日関係が一進一退していて、両国の国民もある程度の誤解を抱えているのもおかしくありません。それにしても、中国人のみんなは善意を持って中国をハグするお兄さんに優しくしてあげました。これは交流の偉力ではないかと思っていたのです。やはり佑果先生の言った通りです。佑果先生はいつも「交流も力になる」と言っています。交流に努力すれば、お互いに理解できるものだと思います。個人と個人、国と国、どの場合でも心を開いての打ち明けは他人の理解を得るのでしょうか。

わたしは最初日本語学科を選んだのはただ外国語を習いたくて、うちの学校は英語と日本語しかありませんので、英語もそんなに好きではなかったから、日本語学科に入りました。日本語を習ったおかげで日本人の友達もできました。大学二年生の時、偶然にひとりの日本人に知り合いました。彼は暫くある中国の高校で日本語の先生を担当していました。ただ一年間で中国語は大きな進歩を遂げて、中国のこともだんだん好きになったそうです。帰国した後、日本語教師の資格を取るために努力しながら、中国語を教えるクラスにも入って、中国語を話せるように頑張っているそうです。一度彼の中国語クラスで撮った写真を見たことがあります。クラスの中で、若者だけではなくて、お年寄りもいることに私はびっくりしました。年を取っても、中国語を勉強して、中国を知りたいがることに私は強く感心しています。彼らは中国のことが好きだからこそ、興味に引かれてきたのではありませんか。逆に興味があつて、交流することもうまくできるのでしょうか。交流すれば、中日関係の改善にとって力になるではありませんか。この力は小さいですけど、みんなの力を絞って何とか腕を振るうと思います。

日本語学科に入る前、日本のニュースにはあまり関心していませんでした。日本のことについて自分にもちょっと誤解がありました。日本語を勉強しているうちに、日本のことに対して前よりわかり次第、誤解がだんだん消えてしまいました。それに、理解しつつあり、日本のことにも興味を持つようになりました。しかし、以前の私のような人もいるのだらうと考えています。あまり知らないで、偏見を持っているのも当然でしょう。だから、交流が一番肝心だと思います。交流すれば、理解し合うことができます。中日の交流のみならず、日本語のことをよくわかっている中国人も日本のことをあまり知らない中国人との交流も必要です。そういう訳で今の私は自分が知っている日本を知らない人に紹介して、誤解を解くために頑張っています。中日

関係の改善に役に立たないのですが、どれだけ小さい風でも気づかれるように、少しでも役に立てば良かったと考えています。

歴史問題のせいで、中国と日本は断行した時期がありました。しかし、グローバル化した現在の状況で、独立に存在する国にとってとても生きていけない世界です。国と国のつながりがあるこそ、世界の発展が向上できるのではありませんか。無論海を一つだけ隔てたの中日両国もそういう状況に違いありませんか。中日両国の人はお互いに関心を持って、両国の人の交流とそのための努力していること、中日関係はますます良くなると証明できるのではないですか。小さい風でも、海を越えられることもできて、遠い所までに行けますし、むしろ一衣帯水の中国と日本、和親の風も定めしに伝えられるのでしょう。

## ★二等賞

### 中日友好—若者の視点から—

東北財経大学 王維聖



「中日友好のために、微力ながらも全力を尽くしていきたい」という言葉を中日関係に関する話を語る時、何気なく偉そうに使っている人がかなりいるだろう。実は昔、私もその一人だった。しかし、「言葉の巨人、行動の侏儒」というように、中日友好に対する本当の意味で貢献したことは、恐らく一つもないことに気付いた。言葉ではなく、何か行動しなければと覚悟した。

そこで、2015年4月28日～5月1日、内モンゴル恩格貝のクブチ沙漠で私は第8回日中青年沙漠緑化交流会に参加した。ボランティアとして、中日交流会に参加したことは初めてで、本当に様々な考えに触れることができ、良い経験になった。同時に、中日の関係、特に友好関係を築くためにあんなにも多くの学生、社会人がいることに刺激を受けた。

クブチ沙漠で、私のような中日青年ボランティアたちが沙漠の厳しい環境に悪戦苦闘しながらも現地の方と協力し、約1500本の苗木を植えることができた。15年にわたりこの活動が行われてきた。活動によって創成された「地球倫理の森」はもう中日友好のシンボルとして注目されている。不毛の沙漠だった恩格貝は今、心を癒すオアシスとなっている。「少しでもその力になればいいなあ」と思って、中国緑化のために活動してくれた日本の青年と顔を合わせて一緒に交流し合い、充実した時を過ごすことができた。

当時、主催者は「中国で植樹をするのは、過去の歴史の償いであり、未来の友好への期待でもある」と語った。日本の友人は長年にわたり中国の人々に知られない片隅で黙々と汗を流し、多くの荒れ山や沙漠に緑の木陰ができた。これは中国にとっても日本にとっても、また中日友好にとってもプラスになる。このような友好的でプラスの活動がより多くの人に知られ、両国国民の心により多くの友好のエネルギーを蓄積し、両国関係の改善と発展を後押しすることもできると深く思った。中国には「樹木を育てるのに10年、人を育てるのに100年」という諺がある。私は中日両国人民が手を携え、樹木を1本1本植え、友情の種を1粒1粒まき、自然が美しくなり、両国人民の心が溶け合うという素晴らしい目標を実現できることに信じている。

また交流会の中で最も印象深かったのは討論会である。グループ討論では日中青年達は積極的に自分の意見や主張を率直に出し合い、激しい討論が繰り広げられ、泣いた青年もいたが、友情の種まきができたというとても喜ばしい成果のある交流ができた。「中国に来る前に中国のことが嫌いだ、沙漠交流により、中国への理解が深まり、中国に好きになった」と感慨する日本青年、また「日本の青年との交流、討論により、日本に対する認識が変わった、とても良き日本の友人ができた、来年もぜひ、参加したい、仲間も連れ



てきたい」と熱く要望する中国の大学生が数多く出た。交流会で、私は日本人の方と交流をしてみないと知り得ないことがたくさんあると気づき、出会いこそが理解への第一歩であることを実感した。

中国と日本は同じアジアの国であるが、国が異なれば文化や価値観も異なるのは当然のことである。しかも戦争のせいで、中日両国がお互いにずっと誤解している。例えば中国の新聞・テレビなどの報道では、どうしても日本のマイナス面ばかりが取り上げられることが多く、それに影響された私たちは日本を否定的に捉えがちである一方、その情報が正しいのか否かを問うことを見落としてしまっている。または日本の報道によると中国の教科書では日本のことが悪く書かれているとあるが、実際のところ、教科書を読んで反日感情を抱くことはほとんどない。そして反日デモを行っている人は、ほとんど高等教育を受けていない人そうである。

残念ながら、現在の中日関係がどうも冷やかで絶えず波立っている。しかしあまり良くない今だからこそ異文化理解を深め、悪い点だけを考えるのではなく、良い点も考え、お互いに理解しあうことの大切さを認識すべきである。

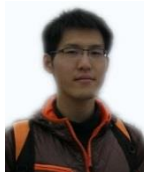
これからは、私たち若者が社会を支える時代である。中日友好のためには、若者同士の草の根レベルでの交流が欠かせない。今後の中日関係を変えるために私たちは何を理解しなければならないのか、どんな行動を起こしたら良いのかを一人ひとり考えるべきである。

そしてネットやメディアの情報に流されることでなく、先入観にとらわれず、自分が目で見て、自分の肌で感じたことをより多くの人に伝えることなど、地道であるが、私たちができる中日友好の関係を築ききっかけになるかもしれない。皆、大河も水の一滴から、出来ることから始めましょう。

### 日中関係と情報発信—日系企業の一社員の視点から—

三菱商事(上海)有限公司 沈震乾

「中国撤退手続き 迅速に」



経済界訪中団 事業環境改善へ要請

この日本の新聞記事の見出しが中国で物議を醸した。今年9月、日本の大企業トップらが参加する訪中団が中国商務部と会合を開き、両国の経済・貿易について意見交換を行うと共に中国での事業環境改善を求める提言書を手渡した。海外企業による中国企業の買収や独禁法の運用基準について様々な提言が盛り込まれたのに、あえて中国からの撤退手続きを見出しにされ、まるで多くの日系企業が一刻も早く中国から撤退しようとしているかのように読めるからだ。

今年、いくつかの中国開発区の関係者と交流したことがある。中国経済が右肩上がりから安定成長を求める「新常态」に変わり、日中関係も不安定な状態が続いている為、日本企業の進出件数は例年より低くなっているという。日系企業の中国法人の設立・抹消手を担当する弁護士事務所の日本人友達もいるが、彼の話では、今年に一部の生産企業が工場を閉鎖したり撤退したりするケースは確かに起きてはいるものの、何か月に1~2件ぐらいの頻度にとどまっている。

聞けばわかることが多いが、結局、中国現地の話を聞ける日本人がどれぐらいいるだろうか。この記事最後まで読み終えれば、中国から撤退する話だけではなくメッセージのピントがずれているのに気付くはず

だろうが、そうする人は少ないと思う。逆に、中国ではこの見出しの漢字を読んで、日本企業が中国市場から撤退する傾向にあると勘違いする中国人がどれぐらいいるだろうか。

この記事に頼りにせずインターネットで確認する人がいるとしても、関連情報がありすぎて本当か嘘かを見分けられず、とにかく多くの日本企業が中国での事業環境が悪いとして撤退しようとするのを既成事実のように受け止めることも容易に想像できる。

メディアやインターネットの情報が人々を大きく左右する情報社会だからこそ、情報の正確性がより求められている。情報発信の主な担い手としてマスメディアの責任は重大であろう。ただでさえ報道はメッセージを誤解されずに適切に伝えるべきなのに、日中関係の先行きが不透明になっている昨今はなおさら慎重に伝えなければならない。私はマスメディアの人間ではないが、日系企業の一社員として情報発信を担当することが多い。今回の見出し騒ぎを通して、日中関係における情報発信の重要性を再認識するようになった。私が勤めている会社は日本の総合商社であり、世界各地でビジネスを展開する上で、当然のことながら情報を大事にしている。特に中国での情報発信について、以下2点は非常に意義があると思う。

1点目は、日本の本社に対して等身大の中国を伝える。今年に入って様々なことが起きており、生産過剰や環境問題の深刻化がある一方で、「一帯一路」やG20会議もある。「チャイナリスク」が日本のメディアによって喧伝されている中で、中国では多くの問題が存在することは事実だが、それは確実に改善されており、国際的なプレゼンスの向上もあり、新たな産業の動向にはビジネスチャンスが潜んでいる。課題も魅力も含めてありのままの中国を伝える必要がある。

2点目は、中国の政府・企業に対して私の会社を伝える。会社の理念である「三綱領」の中には「所期奉公」(事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえのない地球環境の維持にも貢献する)がある。つまり、中国では「世のため人のため」ビジネス活動を行うと同時に、上海の大学に対して奨学金を提供したり貴州での植林活動に参加したりして長年に亘って中国での社会貢献活動を続けている。日中関係が困難な局面に直面しているときこそ、中国にある日系企業のような架け橋が必要になってくると思う。

情報発信は水面に落ちた一滴の水と同じようだ。その一滴はたとえ小さくても、水面に広がっていく波紋は大きく広く遠くまで伝わっていく。情報に真心がこもれば、いずれ波紋が波紋を呼ぶように、多くの人に伝わり、そして、それは国と国、民族と民族の友好を支える大きな力にもなっていくと信じている。

## ★三等賞

### 中日友好—若者の視点から—

大連外国語大学 張典



私の携帯電話にはちょっと変わった折り鶴の写真が入っている。その鶴の右側の翼には中国の国旗、左側の翼には日本の国旗が描かれている。この写真は去年の11月に日本の徳島県の阿波踊り会館で撮ったものだ。中日友好の願いを表して、本当に素晴らしいものだと思う。

私は去年の11月、スピーチコンテストで入賞して、徳島県で短期研修する機会をいただいた。研修の最後の日、阿波踊り会館で送別会が開かれ、「千羽鶴を折る」という活動が行われた。一

人で十羽の鶴を折れば、百人だったら、千羽鶴になる。中国人の留学生、日本人の大学生や先生方などたくさんの方が参加した。ホールの一角に、中国で縁起がよい色とされる赤のリボンを張り、みんなが一つひとつ、自ら折った鶴を吊していった。

日本の「千羽鶴」は、元々は長寿や病氣回復のために作って、入院者への贈り物などで用いられた。今は大きな願い事を叶えるための願掛けの一種となっている。中国にも「千紙鶴」という贈り物がある。心を込めて折鶴を折って、願いを伝える点は全く同じである。

中国でも日本でも、相手に対する同じ思いを同じものに込める。今も、私の心には折り鶴に込めた「中国と日本の友好」への思いがある。そして両国の人々が折鶴に込めた思いが通じ合ってより大きな鶴となって羽ばたいてほしいと思う。

「心は誰にも見えないけれど、心遣いは見える。思いは見えないけれど、思いやりは誰にでも見える」

この詩は、私が二年生の時、先生が授業で紹介してくれた宮澤章二さんという人の書いたものだ。この詩を読んで私は感銘を受けると同時にちょっと心配になった事がある。それは、中日両国で、思いやりの心は共通していても思いやりの表し方に違いがあり、その違いのせいで「思いやりの心」が見えなくなってしまう、誤解が生まれているのではないだろうかということだ。

その誤解を解き、中日両国の思いが伝わるようにすることが私たち若者の役割なのだと私は思う。もしそれができれば、両国の絆は深まり、中日友好の道に繋がるはずだ。

以前、日本人の友人と映画を見る約束をしていたのに、突然、前日に電話で急に用事ができたと言われたことがある。その時、私は深く考えずに「何の用事？」と聞いてしまった。彼女はちょっと困ったような声で「ちょっと用事があって…」とだけ言い、その日の会話は終わった。数日後、彼女によく聞いてみると日本人は、誘いを断る時などに「ちょっと用事があって…」と言い、それを聞いたら「そうですか、残念ですね。また今度」と答えるのが普通だということが分かった。私たち中国人は、何かを断る時、どんな事情があるのか説明しないと、誠意がない、私のことを大事に思っていない、という意味になってしまうことが多い。相手のことを大事に思っているからこそ、中国人は「何の用事」かと聞くのだ。だが、本気でその「用事」の、詳しい説明を求めているわけではない。「もし、相手が困っているなら力になりたい」という思いやりが、この「何の用事」という言葉に含まれている。しかし、日本人がどんな用事かと聞かないのは、相手のプライバシーを守り、相手を困らせないための心遣いによるものだそう。つまり、理由を聞かないことが、日本人なりの思いやりの形なのだ。

結局、「何の用事」と聞くのも、聞かないのも、どちらも相手のことを思っている行動なのだ。実は中日両国の間でこんな例は少なくないと思う。たとえ行動に表した時に違いがあっても、その背景に同じ思いやりの気持ちがあることを知れば、お互いの交流も、より円滑に進むはずだ。そのためには、違う行動を取る背景を、両国の人々に理解してもらうことが必要だ。

今も、私はあの折鶴を折った日の思い出を大切にしている。多くの人々の折り鶴を折った思いが日本から中国へ、中国から日本へ誤解を乗り越えて伝わって欲しいと思う。私自身も徳島県でお世話になった方々の「心遣い」や「思いやり」を中国の人たちに伝えて行きたいと思っている。

今の私は、大学院の一年生として、日本語言語学を専攻している。将来日本語教師になるつもりだ。自分の学んだ日本語、体験した日本文化、出会った日本人のことを中国人に伝え、中国の伝統や文化などを日本人に伝える、本当の日本、そして本当の中国を伝える「伝道師」のような教師になりたいと考えている。私

にできることはわずかだが、長い年月を経て中日両国の間に形成されてしまった誤解や偏見を、少しでも解き両国の人々の思い伝える仕事をして行くつもりである。

一人で十羽の鶴を折れば、百人だったら、千羽鶴になる。これからの中日友好の未来を背負う私たち若者一人一人の役割は、「心遣いが見える」「思いやりが見える」、お互いの姿を正しく理解し合える、そんな中日友好というゴールに向かって、努力していくことではないだろうか。

## 水餃子と焼き餃子の絆

青島大学 李夢双



「はい、ちょっと待ってください」

そして、ドアを開けると美しい女の子の笑顔が目に入った。「こんにちは、この度 302 号室に引っ越して来た井口仁美です。これからお世話になります。どうぞよろしくお願ひいたします。あ、これ、自分で作った焼き餃子で、どうぞお受け取りください。お口に合うと良かったと思って」と彼女はそんなに上手ではない中国語で挨拶してくれた。

これは二年前に初めて仁美ちゃんに会った時の情景である。

大学に入って、親元を離れたが、学校の寮に住むのが嫌だったので、学校の近くのマンションを借りた。それで、一人暮らしの生活を始めた。仁美ちゃんはわたしが初めて知り合った日本人であるのみならず、初めての日本人の隣人である。非常にビックリしたけど、落ち着いたふりをして上手ではない日本語で「ありがとうございます。どうぞよろしくお願ひいたします。」と言っていた。

ところが、その時の初めて見た仁美ちゃんの優しさと親切さが本当にわたしの心を打った。大学に入っただけのわたしは日本語学科の学生と言っても、日本語に全く興味がなかった。それどころか、むしろ嫌っており、日本に対しても良くないイメージばかりを持っていた。なんだか日本人は冷たいと心の中に決めつけていた。しかも、誰かが両親に「お嬢さんの専門は？」と聞いた時、両親ははっきり日本語だと言わなくて、外国語だと曖昧に答えた。だが、仁美ちゃんは私の思っていた日本人と違う。もしかして間違っていたのだろうかとう心のどこかで自分の判断を疑い始めた。

その年の中秋節は三日間休みだった。せつかく余裕があるから、水餃子を作ろうかと思った。一家団欒の中秋節だけど、遠くの日本に住んだ家族を離れて一人で休日を過ごす仁美ちゃんもきっと家のことを懐かしく思っていて、寂しいだろうとわたしは突然思い出した。それで、家に彼女を誘って一緒に中秋節を過ごすことにした。わたしは彼女に水餃子の作り方を教えながら、その歴史や団欒の祝福を含む意味なども説明していた。彼女はそれらのことに非常に興味を持っていたように真面目な顔で聞いてくれつつ、いろいろな質問をした。それから、わたしは急にこの間彼女からもらった焼き餃子のことを思い出した。なんだか中国の餃子と違って、美味しく特別な味がしたような気がした。それで、彼女に是非作り方を教えてくださいと頼んだ。いつか両親にも作ってあげたいと思っていた。それで、彼女から焼き餃子と水餃子を作る時の調味料の違いを学んだ。それに、日本では焼き餃子はいつも副食としての食べ物であり、よくラーメンと一緒に食べるようにしていることを初めて聞いたので、本当にビックリした。わたしはずっと「え!」とか「へ〜」と不思議に思った。こうして、仁美ちゃんと一緒に楽しくて忘れられない中秋節を過ごした。

以前は両親や家族のお年寄りたちから聞いた言葉だけで日本に悪い印象を頭に刻んでいた。この以前のわたしからすれば、まさか日本人と一緒に中秋節を過ごすなんて思っていなかっただろう。今から思うと、当時の自分の無知に本当に慚愧に堪えない。ある調査によると、中国では、7割の国民が日本に好意を寄せていないという。同時に日本でも9割の人が中国のことをよく思っていないそうだ。原因は、以前の私のように相手のことをよく知らず、一人一人の決めつけで勝手に嫌いになるところにあるのではないか。両国の多くの人、中国においては特に老人たちにこのような思想がとりわけ普及している。

実は、ここ数年間、中日関係はよくなってきている。多くの中国に来た日本人留学生が中国に良いイメージを持っているのである。彼らから「中国人が優しい」とか「バスでお年寄りに席を譲る中国の若者がよく見えるよね」といったような評価をもらった。同時に中国の留学生も日本で感動したことがいっぱいあると言われる。

わたしは中国のごく普通の学生として、中日友好のために大したことができないが、植えつけられた間違った思想から脱して、新しい態度で積極的に日本人とコミュニケーションしたいと思う。もっと良く相手のことを知りたいと言う気持ちで一緒に話し合いたいと思う。わたしと仁美ちゃんが、水餃子と焼き餃子のきっかけで、隣人としての絆を結んだように、我々は日本人と中国人のお互いの共感する部分を見つけていたら、隣人としての中日両国の絆も結べるのではないか。これが若者の視点から中日友好のためにすべきことなのではないかと思う。

今日は両親に焼き餃子を作ってあげた。もう帰国した仁美ちゃんも食べたかなと。

## 友好の木を成長させよう

上海理工大学 李凌翰



「もし若者の私達は頑張ったら、日中友好の小さい種もきつと立派な大木になるはずだ！」今でも、ハグさんの言った言葉もよく私の胸に響いている。

八月、猛暑の太陽が疲れることを知らないように照りつけて、南京路の隅々でも空気が重くなって灼熱し始めた。二十代の男の子は「日中友好・日本からのフリーハグ」と書き込んだ木の板を持ちながら、街角で立って周りの友好ハグを寂しく一人で待っていた。

好奇心に駆使された私は、彼のところへ行ってみて話してみた。「あのう、すみませんが、どうしてここでこんなことをしているのか？」話をかけられた彼は意外と頭が回って私を見て、微笑んで答えた「こんにちは、ハグさんと呼んでいいよ。あなたが見た通り、僕は日中友好のために、千人のハグを収集している！いつも、日中友好に何か貢献したいが、この方法を通して、日中人民のお互いに知り合いと理解を望んでいる。」思いがけない答えを聞いた私はびっくりした。しばらく驚いて黙ってから、「そうだか！すごいね！だが、きつと難しいだろう？」聞いた彼は物思いにふけたように、思わず苦笑いして「ええ、二年前から、この収集活動はすでに始まったが、その時、中国で理解してくれた人はあまりいなかった。上に、周囲の人達に懷疑されたり、叱られたりすることもよくあった。」話が続いた同時に、苦笑いの代わりに、微笑みはまたハグさんの顔に浮かんだ。「幸いなことに、今度の二回目は先回と全然状況は違いません。より多くの人は僕を信じて、支持をくれて、本当によかったね！今まではもう何百のハグが収集された。昔からの友好隣国はもう一度仲良くなるのは何よりのものだ！」

彼の言葉を聞けば聞くほど、私の胸がしみじみ詰まるようになった。確かに、彼の言った通り、一衣帯水と言える中国と日本は古くからの友好的な隣国同士で、交際の歴史は二千年も続いている。しかし、近代に入って両国の関係は戦火によって切り崩され、その影響は今になっても消えていない——中日国交の回復からもう四十四年が経ったといえども、中日関係はまだあるべき状態に回復していない。戦争のせいで、両国の関係が昔みたいに仲直りできていないのは残念極まりないことだ。幸い、科学と経済発展のおかげで、両国の国民はお互いの文化を尊重して、お互いに誤解を解き、知り合い、理解し合うことができるし、今中日関係は徐々に改善されつつあると言えようのは本当願ったりかなったりの話ではないか？

私はまだ感慨無量の時、ハグさんまた口を開いた。「実は祖父が影響のこともあって、この活動をはじめた。」ハグさんの言葉は私をまた現実に戻した。「祖父は戦争始まったから、ずっと中国のことを心配していた。戦後の頃、危険と困難にもかかわらず、自ら中国に来て日中友好に取り組んでいた。だが、祖父はいなくても日中国交回復の日を待たずじまいだ。」いつの間にか、涙がハグさんの目から出てきた。「祖父は帰国の時、ある中国人から杉の種をもらった。その友好を代表する杉の木は僕とともに成長していたが、今はもう立派な大樹になった。しかし、今中日関係はまだだ。だから、僕は祖父の跡を継ぎたくて、日中友好に自分の力を出したい。」

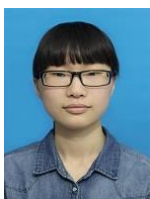
「今、日中の政府両方とも様々な活動が行われていて、両国の国民を交流の機会と場所を提供している。しかし、それだけは今一だ。木にとっては、光と水は不可欠なものだが、肥料がなければ大樹はよく成長できない。それは両国の関係においても通じる真理だ。国の根本として若者の私達は養分と同じものだ。もし若者の私達は頑張ったら、日中友好の小さい種もきっと立派な大木になるはずだ！」ハグさんの話に花が咲いていたが、私もますます思い込んでいった。

そうとも。もし、若者の私達は自分の力を出すことなしには、今は良くなるにしたって、将来また悪化するおそれがあるのだろう。中日両国の国交がまだ回復していない時代、ハグさんの祖父をはじめとする若者たちは先駆者となり、熱心に両国関係を回復する道に没頭していただけあって、両国の国交は回復できた。「青は藍より出でて藍より青し」、当代の若者の私達は、当時の先駆者に負けるものか？ 将来の中日関係は私達のいかんで、私達も気張ってもっと力を出すべきだ。

突然に携帯が鳴って、話し込んでいたハグさんと思い込んだ私を中断した。惜しいながら、急用なので、ハグさんと別れざるを得なかった。互いにハグして別れた。一步を踏み出したところ、ハグさんの声 came。「李さん、いつやれか、今だろう！」若者同士の皆さん、一緒に頑張って、中日友好の養分になって、友好の種を大木にならせよう！

## 魚心あれば水心

南京郵電大学 沈炜



「両国は、相手国民に対する感情の悪化が、国民の交流を阻害し、それがさらに感情の悪化を招く悪循環に陥ることのないよう努力すべきである。そのために、自発的で継続的な民間交流を量・質ともに完成させ、特に、若者の相互交流の活発化を目指す。」

2016年9月27日から28日まで、「第12回東京—北京フォーラム」が東京で行われた。前述は今回のフォーラムの成果として、『人民中国』のウィチャット購読版に載せられた「東京コンセンサス」の一部である。

この見出しが目に映ったとたん、中日関係を進める柱となる民間交流が盛んに行われ、かけがえない役割を果たしているおかげで、両国の間に存在する食い違いや争いなどによる一触即発の状態は、一時緩和できるだろうという考えが頭に浮かんできた。

日本語の勉強に没頭し始めてから丸三年になった私は、中日関係はずっと紆余曲折の中で前に進んでいくのだろうかと思ひ深く考え込むことがある。更に今日両国間の政治関係はまるで風前の灯のようであるとも言えるだろう。このほど、我が国の南海をめぐる紛争は一応決着したが、日本の態度が再び中国人民の心に傷をつけたことはすでに認めざるを得ない事実であった。自ら「貧しい国」と思い込んでいる日本が資源を求めたい心に対し、我々は同情を寄せてしかるべきであるが、我が国の利益を損なうなら、厳正な姿勢で立ち向かうほかないだろう。

ところで、政治分野での底冷えにひきかえ、近年、経済や文化での交流は一見して大変盛んである。特に、国内でブームとなった日本への旅行が勢いよく発展し続けているのに伴い、「爆買い」の熱も折に触れて両国のメディアに取り上げ、ますます世間で話題になった。自国製の商品を支持せず、ひたすら日本製の高額商品から日用品まで様々な商品を買ひ耽る国民の行為への批判が国内に飛び交う一方、低迷している日本経済に新たな血液を注いだ中国人観光客が殺到するのを目の当たりにして、怪訝そうな顔をするわけにもいかず、やや不自然な笑顔で優れた商品やサービスを提供している日本人もさぞ困ることだろう。私の目から見れば、このいびつな発展は中日関係を改善するどころか、むしろ逆に悪影響を与える恐れがあるのではないかと心配している。中日間はいっそう平等な目でお互いを理解すべきである。何故なら、過去を振り替えて見れば、日本の中国に対する態度は一度も平等ではなかったという事実が明らかであるからだ。

遣隋使、遣唐使の時代、日本人は謙虚な心持ちで茫洋たる海を乗り越え、我が国の仏教、儒教という高度な文明を吸収した。しかしながら、日清戦争が終わった後、「眠れる獅子」と言われていた清朝を打ち倒して、既に強い国になったと意識した日本人は一変する。それからの一連の事件は言うまでもない。

今日、教科書に載せられた山崎正和さんが書いた「水の東西」を再読した。中から「行雲流水」という熟語が出てくる。「一つの事にこだわらず、一切を成行きに任せる」という意味でも解釈されている。これからの中日関係は既往にこだわらないままで発展するのは当然のことであるが、やはり人々の努力も見逃してはいけない。

来年は中日国交正常化45周年、再来年は中日平和条約締結40周年を迎える。それから、2020年東京オリンピックが開催する時、中日関係はどこまで進んでいるのか。無論、我が国は中日国交正常化が復帰して以来、弛まぬ平和的な対話で両国関係の発展に取り組んでいる。

先日、日本人の先生と一緒に昼ご飯を食べた時、魚を注文した先生の前に座った私は、「魚心あれば水心」ということわざをふと思い出した。もしかしたら、まさにこのことわざのように、中日関係の間に春風は再び吹き込むかもしれない。

## ★優秀賞

### 日本語ができて、よかった

華北科技大学 李雪濤



みんなが知っているように、私たち日本語学科の学生にとって、日本は理想的で、行かなければならない国である。思い返せば、私は初めて日本語に会ったから、もう2年になった。でも、日本語の勉強は本当に辛い。昔から、「日本とは何か？僕は本当に日本語が好き？」という質問がずっと私の心にあっている。

だから、日本に対して、興味とか、疑問とか、複雑な感じを持って、今度の夏休みには、姉貴と一緒に日本へ飛んで行った。私たちは8月の初めに、北京から名古屋空港まで、ただ3時間ぐらいかかった。飛行機から見て、日本は狭くて長い島国だ。私たちのご存知のようだね。そして、町は数字の一のように築かせた。日本時間夜22時、日本に到着した。空港のスタッフと簡単な挨拶をして、これまで、日本に到着してきた感じが現れた。

第一日、初めて日本に来てから、スーパーで恥ずかしくて、小さな声で店員さんと話した私は本当に自信がなかった。でも、第二の日に、偶然に、レストランでご飯を食べたときに、店員さんに「すみません、お手洗いはどこですか？」と言って、同行の皆さんは私が日本語を話しているのを発見した。これから、私の短い通訳生活が始まった。

ツアーには、姉貴と私を除いて、ほかの人は全部母親と子供だった。30代ぐらいの女性は化粧品とか、カバンとか、そのようなものが大好きだ。だから、毎日化粧品の説明をおばさんたちに訳して、ちょっとおかし。実際に、その化粧品の説明には、半分ぐらいの単語は私にもわからない。ほかの半分は多分漢字語だ。いいかえれば、私たち中国人に対して、大意をつかんで、理解するのは大丈夫で、全然問題ないと思う。でも、しっかり考えて、私たちはあくまでも外国人だ。今、知らない国にいる。日本語学科の学生としての私は、日本に到着した後で、イライラして、気持ちが悪くなった。同行の人は言うまでもなく、きっと不安と感じている。こんな時、ある人に頼んで、心に少し安心な気持ちを感じえることは最高だと思っていた。その一方で、私も日本語でコミュニケーションの能力を鍛えて、心から感謝しておる。中国には、「郷に入っては郷に従う」という諺があったから、あの日から、ツアーのみんなは心の荷物をおろすように、日本特有の文化を感じ始めた。

実際に、歴史などの原因で、私たち中国人には、日本とは悪魔だと思っている人は少なくない。言わば、それは一般的な認識だと言っても過ぎることはない。特に、父親の世代にはその認識が深い。しかし、時代が変わって行っている。今現在、私たち大学生、いわゆる、青年にとって、日中の歴史と痛みを忘れてはならないままに、現代日本の発展に注目して、一緒に日中関係を維持するのは必要だと思っている。中国の周恩来元総理は1950年代から、「大同につき、小異を残す」という外交的な理論を提唱していた。中日交流という異文化交流もそのような行き方で行っていることだと思っている。今年、Rio オリンピックの開催中、日本人卓球選手の福原愛さんは中国に人気者になった。福原選手のおかげで、中日関係もだんだん暖かくなっていることがあった。これから、私も福原選手のように、中日交流の橋になるのを目標に日本語を勉強する。

人生は旅である。日本語の勉強も中日関係の発展も流れに逆らって船を進めることである。途中で、急流もあり、暗礁もあり、でも、ある日、対岸に至るとき、美しい景色に酔い、こんな感慨が心から出された「ああ、日本語ができて、本当によかった！」



## 民泊—友好の力

雲南民族大学 羅雯雪



子供の時から、「知らないイコール危険だ」というように、ずっと教えられてきた。民泊というのは見知らぬ人の部屋に泊まることだ。まさにその未知のものだ。

今年の夏、airbnb(民泊予約サイト)の創業者である Brian という人のスピーチをインターネットで見た。「知らないイコール危険だ、というのは心の中の偏見から来ている。さらに、もし何か悪いことが起こると、猜疑心に満ち溢れ、危機に陥ると、憎しみが強くなる」と彼が言った。確かに、彼の言う通りだ。

彼の提唱する「民泊」というアイデアが面白いと思ったので、実際に体験してみようと思った。私は日本語を専攻しているので、日本に行くことにした。あまりにも突如な決定だったので、一人旅になった。ちょうど7月には祇園祭がある。行き先は京都に決めた。もちろん、宿泊予約は airbnb のサイトを通してだ。

まずは京都で4泊した。築100年以上の日本家屋と心地よいリラックス出来る庭がとても気に入った。そこは古い京都の長屋を、できる限りオリジナルな形を残し、最低限必要な所だけを改装した家だ。だが、部屋は個室ではなく相部屋(女性部屋)だった。それから大阪で宿泊した。あるシンプルな現代のアパートだった。簡素なスタイルだが、人の暖かさを感じさせてくれた。

出発の二、三日前、予約した宿のホストは家の住所や名前などを教えてくれ、しかもメールで地図を送ってくれた。しかし、飛行機が遅れたせいで、関西空港到着は20時になった。入国手続きや荷物受取、空港からの移動時間を考えると、あと二、三時間はかかる。チェックインの時間には間に合わない。約束を守るべきだが、仕方がないのでホストに電話連絡した。「大丈夫ですよ、私の家でお待ちしています」と言ってくれ、少し安心した。京都に到着し、送ってくれた地図を頼りに歩くと、すぐにその家が見つかった。インターホンを鳴らすと、先ほどの声の主が出迎えてくれた。ホストは気立てがいいおばあさんだ。彼女は部屋の施設や構造、長屋に泊まるフランスやイギリスからの客を親切に紹介してくれた。もう随分遅い時間だったが、リビングに招かれ、抹茶をいただいた。そして、彼女は京都の地図とバス路線図を渡し、おすすめのコースを説明してくれた。例えば、清水寺へ行くもっと面白い道、観光客があふれる花見小路通と比べてもっとのどかな風景、和風建築、情緒豊かな町並み、伏見稲荷へ行くいい方法など。毎日京都をたっぷり味わい、宿へ帰ったら宿泊客同士で和やかに談笑し、快適に過ごした。さらに、おばあさんとのコミュニケーションが楽しかった。本当に情熱的で、愛想がいい人だ！おかげでガイドブックには載っていないもう一つの京都をのぞくことができた。

そのあと大阪へ行った。今度のホストは専業主婦だ。夫と二人暮らしだそう。彼女の家の床は鏡のように一点のほこりもなく、窓からは限りなく広がる海が見え、トイレもレストランのようにきれい。そして、彼女は人なつこい性格だったので、気兼ねなく大いに語り合えた。以前、主婦というのは毎日掃除や洗濯などの家事に明け暮れる退屈な人だと思っていた。しかし、彼女と話してみて、自分の勘違いに気付いた！彼女は、私がイメージしていた主婦とは明らかに違う、知識人だった。毎週2冊以上の本を読むそう。さらに、ゲストと出会い、違う文化や生活習慣に接しているので、外国人に対しての見方が客観的だ。「外国と言っても一概には言えない。日本人だって親切な人もいればそうでない人だっています」と言う言葉が印象に残った。

このような民泊のおかげでアットホームな雰囲気に入れながら、日本の秩序、清潔さ、気配りの上手さ、サービス精神の高さなどを味わった。想像していた以上に素晴らしい旅だった！

実は近年、訪日観光客はずっと増えている。しかも、少なくとも 2020 年までは増え続けることが予想されている。そのため宿泊施設不足が深刻化しており、日本政府はその問題解消の秘策とも言われる「民泊」を利用することにしたそうだ。その一方でさまざまな問題も起こっている。近隣住民からは治安悪化や騒音問題などの苦情が寄せられ、民泊に批判的意見も出てくるようになったという。

しかし、民泊は観光客、特に若者にとってはよい選択だと思う。それは単に宿泊料が安いというだけではなく、日本の習慣や文化を理解する助けになるからだ。普通の日本人と直接コミュニケーションし、日本と中国における様々な違いを実感すれば、日本に対する本当の理解がさらに深まるのではないだろうか。今回の旅行で私はそう強く感じた。

さあ、中国の若者よ、もっと世界に出よう。そして、日本に行って民泊を利用しよう。

### 中日友好—若者の視点から—

#### 天津外国語大学 徐彤



前途は明るい、道は曲がりくねっている。

我々はよくその言葉で物事の発展を言う。中日友好の未来もそうである。蛇行しても、時々退いても、将来はきっと互いに支えて、ともに前へ進む関係になると信じている。

日本語を勉強してきた若者として、私は自分の経験と結びあわせて、自分の視点から中日友好について話したい。

大学に入る前、日本のイメージは大体教科書からもらった。一衣帯水の隣国で、中国とは昔から密接な両国である。何度も苦難を経験して、海を渡ってきた遣唐使、遣隋使。美談として伝わってくる阿部仲麻呂。それに、数多くの困難と危険を乗り越えて、日本について、仏教の教えを広めていた鑑真和尚。中日友好のため、命まで捧げる覚悟もある人たちに感心する。もちろん、友好の道が曲がりくねって、いつも順調に進むことではない。鎖国政策をとった中国が戦争に陥った。甲午戦争で、清の惨敗。第二次世界大戦で、日本が中国におかした罪。哀しい話もいろいろあった。1972 年、ついに友好の光がさしてきた。しかし、教科書だけによっては、中日友好について、深く認識できなかった。

それから、日本語を専門として、大学に入った。日本語を勉強しながら、日本の歴史や文化にも接触した。日本という国はどんな国なのか、ますます理解できてきた。大学には日本人の先生がいる。この先生は、教育熱心で、毎日本を読んでいる 60 代の年寄りである。先生から日本についていろいろ教えてくれた。私は日本の桜、和服、木造のお寺などに興味があって、ぜひ日本に行きたいと思っていた。日本への理解を深めることを通じて、感じた距離感がますます薄くなってきた。勉強によって、ただの概論的な知識ではなく、もっと具体的なイメージができた。しかしその時も、中日両国にはいろいろな問題があった。それらの問題はいまでもなかなか解決できない。

今年、私はインターンシップに参加して、7 月から、三ヶ月間の実習生生活を始めた。働き場はホテルで、充実した日々を過ごしてきた。今度は、教科書だけではなく、テレビやネットだけではなく、自分の目で、耳で、自分自身で日本を感じている。緑いっぱい、澄み切った空がある日本がすきである。効率的な仕事ぶり、いつでもどこでも聞こえる挨拶、細かいところまでの他人への思い遣りに感心する。京都のお寺、奈良の

鹿に憧れている。もちろん日本にいるとき、いい事ばかりではなく、つらいときもある。しかし、その色々な経験があるからこそ、日本について、さらに中日友好について、自分の視点から纏められるだろう。

中日両国の関係が平和に進むときはもちろん大丈夫である。しかし、何かあったら、例えば、日本政府が公然と歴史を無視するとき、領土の紛争が激しくなるとき、若者はどうすればいいだろうか。頭に来て、日本をひとしきり避難したり、日本製品を排したりすることは一番いい選択だろうか。自分の立場を守りながら、もっと冷静に対応すればどうだろうか？日本政府はさておいて、日本人には中国に好意を持っている人がたくさんいる。だから、遙かな見通しを持って、中日友好のために、力を尽くせばどうだろうか。対立の状態が続けば、中国の発展にも、日本の発展にも一利もない。グローバル化が進んでいる世界には、経済が密接している中日両国は自国の発展のために友好関係を守らなければならないと思っている。それに、中国は平和を先頭に立って提唱する国で、大国の責任感を持って、できるだけ隣国の日本と対立な姿勢をとらないようにするから、中日友好の道はいろいろな問題があっても、この先が明るいと思っている。

最近、翻訳しながら、いろいろな記事を見ていた。爆買いの中国人、マナー違反の中国人、多くの日本人が中国に対して親近感がなくなりつつあるそうである。それについて、中国人の若者として、考えなければならない。小さくても、強い日本には学ぶ価値のあるところがたくさんある。気持ちに左右されなくて、もっと理性的に、中日関係を認識すべきである。自分の国のために、中日友好のために、もっと相手の状況を理解して、最も賢明な選択をしよう。

## 中日関係と情報発信

### 広東外語外貿大学 喻瑩



中国と日本がもっと密接な関係を持つように、情報のとらえ方は肝心なことだと思います。そして、情報を発信する主体として、私たちひとりひとりにできることは何かというと、知ることと伝えることなのではないかと、私は考えています。

まずは知ること。言い換えれば、「情報発信」の前提とする「情報収集」の段階とも言えるでしょうか。

番組で日本人留学生ボランティアグループ「PiaSmile」のメンバーたちが中国の河北省の希望小学校で活躍している姿を見たことがあります。最後の小学生向けのアンケートに「日本人留学生への印象は？」という設問があって、「テレビに出てくる日本人と違った」といった答えが見られることがあって、強く心を打つものでした。

彼らは辺鄙な地域に住んでいるので、日本人を知るためのルートはテレビや新聞といった媒体に限られています。しかし、彼らだけではなく、情報の不均衡というのは中国全体の共通問題になっているのではないかと、日本で留学していた間何度も気づかされたのです。

中国と日本間の情報が時には偏っていること、情報交換のルートや手段における制限のあることを認識した上で、私たちはその制限を突破し、実際に接する中で実践的な「情報収集」を自分なりにするべきだと思います。

情報収集ができたことを前提として、情報を発信する段階では伝えることが自然に必要なってきます。

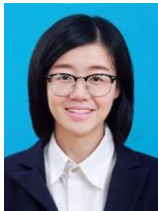
清華大学のある日本人留学生が「日本人は中国の食べ物をどのように食べる？」というシリーズの動画をネットにアップして一時期に人気になっていました。食べ物の交流を通して、一つの物事に対して同じ中国人であってもみんな違う意見を持っていることを彼が強く感じたといいます。ネットである人たちの攻撃的なコメントに対して、彼はこう言いました。「こう実際に接する中で、私が言ってることが日本全部ではないと、まず互いに了承した上で、こういう考え方もあるよ、自分みたいな日本人もいるよというふうに伝えていきたい。」と。

先ほど述べたように、間違いなく、情報の不均衡状態は中国と日本の中に存在しています。だからこそ、この状態を改善するため、多くの人がこの留学生のような「情報の使者」となるべきであると思います。勧誘でも説得でもなんでもなく、まず自分は国全体の代表者ではない、自分は絶対正しいとも限らないということ、を慎重に互いに認識した上で、ただ個人的になるべく偏っていない情報を世間に伝えていきます。その後の判断は口を出さずに聞き手に任せてもいいでしょう。

もし、実践的な活動で「情報収集」を行い、なるべく偏っていない「情報発信」がうまくできて一人ですぐ中日関係の全てを変えられることはないでしょう。しかし、一人一人が接触する中で構築していく繋がりは、薄くて弱々しいものでありながら、繊細で柔軟で、そして受け入れやすいエネルギーでもあると、私は思っています。従って、一人一人の個人的な知ることと伝えることによる情報発信は、きっと糸を紡ぐように、中日関係の未来を編んでいくのではないかと、私は思っているのです

## 古詩・越し

合肥学院 張玉如



「ねえねえ、玉如ちゃん、土曜の詩歌祭り行く？」  
「行かない。せつかくの週末だし、寝るよー。」  
「でもさ、今年の祭りに日本からの吟詩舞使節団が出演するって聞いたよ。外国人が遠くからわざわざうちのような小さい町に来るのは珍しくない？」  
「それはそうだけど。」

私の故郷である馬鞍山市太白町は『詩仙』と呼ばれる李白が晩年を過ごし、永眠するまで詩と共に歩んだ最後の場所だ。ここに残った詩の名作とエピソードを記念するため、毎年、重陽節の頃、「馬鞍山中国李白詩歌祭」が行われている。私にも外国から来る人を一目見てみたい。けど、中国人ではなく日本人が古詩を朗読するなんて聞いたこともない。そんな疑問を浮かべつつ、その日は日常と変わらない日々を過ごしていった。こうして友達を誘いを断り、土曜日はようやくのんびりグースかできるかと思いきや、いつも一番起きる母が朝早々に大音量でテレビをつけた。小さなまちでも大きな祭りに、母は自然と心が湧いていた。しかし、私のどかな休日を取った母は恨んでも恨みきれない。

「ほら、始まったよ。日本人の出番。」期待に胸を膨らませる母の顔は、文字通りわくわくしていた。それに対して私は「えっ、全員お年寄りなの？遠くから来て大丈夫かな？」と対照的にドキドキな心持になった。

そうしてそんな私の心配をよそに、テレビはゆるゆると音楽が流し始めた。詩吟を基本としながらも、自国の文化である書道とダンスを組み合わせている。指揮の下、20人以上の日本人が次々と舞台を縦横無尽にかけ回り、情趣たっぷりとおふくんだ声で李白が持っている雄大な志と豪壮な気概を表している。彼らの目に映る

その限りない希望の光はスクリーンを隔てても私の心を溶かしていった。

「なんでこの人たちは漢詩にそれほど情熱があるのだろうか。古文で書かれた漢詩の意味を本当に理解できるのかな」あの祭りからずっと私は考えていた。思えば、若者にはそのように情熱的に物事に取り組むことが少なくなったと思う。ルームメートの一人が大学に入ったばかりのころ、「私はヨガをする。美しい女性になるためにも今から頑張らなきゃ」とギラギラと目を輝かせながら私に言った。あの高らかな宣言から数ヶ月、気づいたときには彼女はヨガへの興味がなくなっていた。私は気になって「なんでやめたの？」と聞いてみた。「いやー、二ヶ月も頑張ってきたけど、一向に痩せる兆しも見えなくて挫折しちゃったよ。私は結果にコミットできなかったわー」と返事してくれた。

私は彼女らしいと思いつつも、みんな簡単に辞めていくんだなーと心の中に引っかかったものを感じた。それは怖さと言ってもいい。情熱という言葉がどこか若者の中からいなくなってしまっている気が私はしたのだ。じゃあそれと比較して、あのお年寄りたちはなんののだろうか。情熱の元はどこからやってくるのだろうか。そのとき私はまだわからないままであった。

しかし、当時どうしても理解できなかった彼らの気持ちが、日本語とともに歩んできたこの四年目に迎えるにあたって、何となくわかるような気がした。

それは文化の違いに引き寄せられたからだと思う。

文化の違いは時に互いに疎遠にする材料にもなるが、その文化の違いによって逆に興味を持つようになった人もいる。あの日本人たちの情熱はそれを証明している最高の例なのではないだろうか。お年寄りでさえ、言葉を越えて自分たちの人生を謳歌している。若い世代として、彼らに負けるわけにはいかない。摩擦が存在しているからこそ、お互いにより深く理解し合うきっかけを作ってくれるのではないだろうか。ひっそりとしかし確実に両国の間に友好の種を蒔いたり、交流の扉を開いてくれたりした摩擦から逃げることなく、きちんと向き合う姿勢が若い世代として取るべきな態度だと思う。立ちほだかる壁を私たち若者の力でどんどん乗り越えられれば、太陽の下で輝く美しい中日の未来が見えてくると私は信じている。

「皆さん、そろそろバトンを渡しますよ、準備は出来ていますか？」そんな言葉が、あの日本人の詩吟のリズムとともに聞こえてきた気がした。

## 中日友好関係の懸け橋について

大連民族大学 侯潤娟



中日友好のための懸け橋は必要だ。

最近福原愛さんと江宏傑さんが結婚した。日本にしても、中国にしても、多くの人が祝福を表すと同時に、大きな反響を呼んだ。言うまでもなく、中日両国の国民とも愛さんの結婚のために非常に喜んでる。

もとより、福原愛さんは中日の共通の話題になっている。彼女は懸け橋として中日友好に大いに貢献している。

8月のリオオリンピックの卓球の試合は非常に素晴らしかったと思う。最後は中日両国で争うライバル関係になったが、競技を通してお互いに励まし、ベストに向けて一生懸命に頑張っていた。最終的に誰が勝つかにかかわらず、双方とも力を尽くした。そのような競争は中日の卓球の発展に役立つし、中日友好の発展を促すこともできる。

卓球を通して中日両国の国民にお互いをより深く理解させる。福原愛さんは10代の頃からずっと中国で卓球を練習していた。彼女は中国人のコーチに学んで、そして中国の選手と交流して、次第に自分の能力を向上していった。その間、彼女は東北なまりを身につけたばかりでなく、多くのコーチや卓球選手などと友達となっている。更に、中国でも大人気の選手となった。

言うまでもなく、彼女は中国や中国人のことについて更に深い印象を持っている。中国人も福原愛さんによって日本人に更に可愛い印象を持っている。中日両国の国民はより深く理解できるようになっている。

福原愛さん、そして卓球、これらを仲立ちとして中日友好の関係発展を進めている。そのうちにお互いに競争していて、お互いに学んでいる。そして中日両国の卓球事業を進展させ、中日友好もよりよい方向に進んでいる。

そのため、中日友好関係の発展に両国の交流や勉強が大事であることは言うまでもない。もちろん、私たち普通の人の力も欠かせない。普通の人も重要な懸け橋だと思う。国の政治的な立場にかかわらず、両国の国民が中日友好に力を入れて、欠かせない役を演じている。

私の先生は今博士論文を書いている。その先生の日本人の指導教員は今82歳だ。最近、先生は仕事や生活が忙しく、論文の内容に大変頭を抱えて、書けば書くほど諦めなくなった。先生は自分の状況を日本人の先生に説明したところ、82歳の先生は非常に理解してくれて、「〇〇さんはもう十分頑張りました。これから私が高さんの論文を補完してあげる」と言って、論文の仕事を担ってくれた。その夜、82歳の先生は夜4時までやり通して、先生の論文を直してくれたそうだ。先生も非常に励まされた。そのため、先生は再度論文に力を入れて、最後まで頑張り抜くことにした。

この話を聞いた後、私たちはみなその82歳の先生の精神に感激した。日本人の先生が中国人の学生をそういうように大切にしてくれていることには感心させられる。学生である私たちはみな自分の日本人の先生を思い出した。先生たちはいつも学生に優しく、熱心で、いつも元気一杯に仕事をしている。彼らはみな中日の文化交流の大使ではないだろうか。

普通の人である日本人の先生たちも中日友好関係の懸け橋だと思われるべきだ。彼らは自分の国の文化や社会などのさまざまなことを中国に伝えている。そのうちに中日両国の交流の機会が増えて、中日両国の国民もお互いに理解を深くしている。中日友好関係も更に一段と向上させねばならない。今日世界の主題は平和と発展のことである。中日友好関係の発展は両国の国民の幸せな生活に有益であるばかりでなく、世界の平和と発展も推進している。このプロセスには懸け橋の役割が重要だと思う。私たちはみなこの懸け橋になって中日友好の発展を進めることができる。

## 会えない仲間

### 黄岡師範学院 郭嘉玉



それは、まさに盛夏にあたる夏休みのことだった。まだ小学生の私は親について北京へ旅行に行った。真っ赤な太陽の下で、頑張って少しずつ万里の長城を登っていたのだが、終点が意外に遠く、なかなか着けなかった。「もういや！」と私は母に不平をこぼしてしまった。その時、突然澄んだ話し声が私の耳に入ってきた。耳を澄ましてじっと聞いてみたが、その会話の内容はまったく意味がわからなかった。「外国人かな」と思って、声の主を探してみると、目の

前に二人の若い女性が笑いながら何か話し合っていた。好奇心に駆られたわたしはこの二人のそばに近づいてこっそり観察してみた。彼女たちは顔も体つきも皮膚も中国人と同様であり、口を開かなければ絶対外国人とは思われないだろう。そう考えているうちに、一方の女性がふっとつまずいて倒れそうになった。「ごめんなさい」と、彼女は振り返って後ろにいる私に申し訳なさそうに言った。「え？何か話してみたい、どうしよう、意味がわからない、って言うか、これって日本語？もしかして謝っているのかも」。当時日本語がまったくできなかった私はいきなり話しかけられたので緊張してたまらなかった。「はい」、しばらくして私が唯一知っていた日本語が口から出てきた。すると、二人の女性はぷっと吹き出して、笑顔で私の頭をなでた。そのことがきっかけで、私たちはこの二人と一緒に上に向かって登り続け、旅を楽しんだ。

なんと不思議なことだろう。いくら言葉が通じなくても心は通じ合えるのだ。一緒に旅をすれば、お互いに見たもの、聞いたこと、体験したこと、そして感じたことを共有できるのだ。普段めったに「会えない」人を目にすると、この人はいったいどんな人なのか、私はこの人と仲良くなれるのかと、いろいろ心配や不安が出てくるものだ。ところが、いったん会って、一緒に何かをしてみると、すぐに相手のいいところや共通点を発見し、仲良くなるということは意外と多い。まして、中国人と日本人は皮膚も髪の毛の色も同じであり、同じアジアに所属し、両国文化にも共通点がある。よって、お互いに共感を覚えるのはごく自然なことだ。

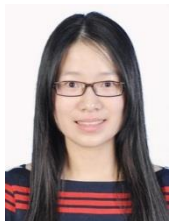
やがて大学生になった私は日本語科を選んだ。そのことを周りの祖父や祖母などの年配者に話すと、疑問を持つ人がかなりいる。さらに、ある人から「日本人が嫌いだから、日本人とは友達にならない」と言われたこともある。そのたびに、私はいつでも真剣に相手に説明してあげた。例を挙げて、学校で日本語を教える日本人の先生たち、ネットで知り合った日本人の友達がいかにやさしくて親切な人を教えてきた。私の話を聞いた後、彼らもだんだん落ち着いて日本のことをもっと理解できるようになった。例えば、テレビで日本に関するニュースが出たとき、祖父は以前とは違った新しい目で両国の協力と共栄を評価できるようになった。こうした変化を見て、私は心からうれしく思っている。日本語科の学生である私は授業などで日本人と会うチャンスがあるので他の人よりもっと日本を知っている。しかし、中国人の大部分は現実生活で日本人に会ったことはない。そのために、戦争ドラマの影響だけを受けて、日本を一方向的に嫌いになってしまうのだ。

ところで、近年中国人と日本人との接触は次第に頻繁になってきた。実際、旅行や買い物などが両国経済の発展のために大きな力となっている。旅行を通じて、これまで会えなかった日本人に会えるようになった。中国のいろんなウェブサイトでも、日本人の利用者がますます増えてきた。彼らはウェブサイト上の映像で日本の流行文化を紹介し、中国の人々の興味をそそることに一役買っている。つまり、インターネットの普及によって、今のありのままの日本を見ることができるようになったのだ。こうして、中国国内の人々の日本人に対する激しい偏見は徐々に少なくなっていくだろう。

「会えない」から知らない、付き合ったことがないから信じないという不条理な理屈は、人間関係だけでなく、国際関係においても大きな問題となってきた。この問題を解決するには、相手の国へ旅行、勉強、仕事などの目的で実際に行き、現地の人と交流することが大切だと思う。一人の人間が実際に知り合うことのできる相手の数には限りがある。でも、もしみんながそうやって一人一人の手を繋いで力を合わせるなら、きっと国と国との間の架け橋となれるはずだ。私は小さいころに初めてあの二人の日本人に会った時から、もっとたくさん日本人と交流して中国の美しさを伝えたいと思うようになった。そして、私だけでなく、他の中国人にもちゃんと自分の目で日本人を見て判断してほしいと思っている。これからも、自分なりの方法で異文化の交流のために努力していきたい。中日両国がお互いにちゃんと「会える仲間」になるすばらしい未来が、きっともうすぐ到来すると私は深く信じている。

## 中日友好—若者の視点から—

温州医科大学 叶璐



ある日、日本から一通の手紙が届きました。「なんだか中国に親戚ができたみたいで  
す」。

これはこの手紙の中の一節ですが、わずか 18 字で、夏の思い出がよみがえってきまし  
た。それは一年ほど前のことです。学校のサマープログラムで私は初めて日本に行き、1  
か月ほど過ごしました。

初めての日本に対して、どんな国だろうか、日本人は親切だろうか、また和食になじむことができるら  
うかなど、不安でいっぱいでした。

一方、サマープログラムには「日本人の家で家族と一緒に生活する」というホームステイの項目があり、  
不安を感じながらもとても楽しみにしていました。日本滞在 5 日目に、ようやくそのホームステイが始まり、ホ  
ームステイ先の奥さん—裕子さんともお会いすることができました。そして私はたった二日間でしたが、この  
ホームステイのおかげで、貴重な体験をすることができました。

まず第一に犬のモモちゃんのことです。私は犬が苦手なのですが、モモちゃんは可愛くて、私の言葉が通  
じるように感じました。そして、お別れの日にはモモちゃんが悲しみに泣いているように見えたのを今でも覚  
えています。犬に近寄ることさえ怖くて、撫でることなど全然できない私は、ただ笑顔で手を振るしかありま  
せんでした。こんなダメな私に対しても、これほど親切にしてくれて、私はとても感謝しています。

二番目に、日本の夏祭りに行ったことです。私が夏祭りに行きたがっていた裕子さんはわざわざ車でお祭  
りのある町へ連れて行ってってくれました。そして浴衣、団扇、巾着袋なども用意してくれていました。また写  
真をたくさん撮ってくれたり、おいしいチキン南蛮、伊達巻きなども作ってくれたり私はとても感動しました。

また裕子さんの家族と過ごすだけでなく、彼女の友達もたくさん訪ねてきて、私と話しをしたり、歌を歌  
ったり、みんなで写真を撮ったりしました。本当に楽しい二日間でした。

そして帰国後も裕子さんとの繋がりは続いていてメールやウィーチャットでよく連絡しています。ウィーチャ  
ットは日本ではあまり使われていないインスタントメッセージングアプリで、日本人の裕子さんにとっては、連  
絡先の友人も私しかいませんが、彼女はずっとこのアプリで、私や私の家族とビデオチャットをしています。

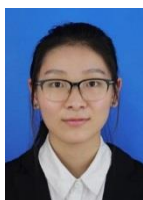
この気持ちは、決して忘れることはありません。裕子さんと会えて本当によかったと思います。これもまた  
ひとつの「中日友好」ではないでしょうか。

中日友好の道は、茨の道かもしれません。個人の力には限界があるかもしれません。でも小さなことから始  
めるだけで、茨の道を進むことができます。そして両国の相互理解を促進することができると思っています。



## 中日友好 若者の視点から

東華大学 戴俊男



「友達と、スキーにいったよ。何回も転んだけど、なんか楽しくて気持ちいい。」とモーメンツにアップし、体育館の入り口で撮った写真を二枚付け加えました。

「こんな楽しい一日、ぜひ友達と分かち合いたい」と思ったのです。すると、「楽しそう!スキーじゃなくてスケートですね。」と、コメントがありました。

「え、スケート? ああ、スケートだ。なんでスキーと間違っただろう。恥ずかしいなあ」と、顔が赤くなってきましたが、相手の好意を無にしないように、「直してくれて、ありがとうございます。」とすぐに返事しました。

間違っているところを直し合ったり、わからないところを教え合ったりすることなど、このような助け合いは『Hello Talk』という外国人と交流できるアプリでは、ありふれたことですから、何か日本語の勉強でつまづいた時、モーメンツにアップすると、どんな時でも助けてくれる人がいます。

ある夜、ジョギングしている途中で、中国語の「夜跑」は日本語でどう言うか知りたくなりました。「夜ジョギング」のような中国語らしい日本語が明らかに正解ではないのはわかります。そこで、モーメンツで「中国語の『夜跑』は日本語にすると、夜ジョギング? 違うよね?」と聞きました。すると、ある人から「夜逃げ」という返信をもらいました。この「夜逃げ」という言葉には、「夜の間にこっそり逃げ去る」という意味しかないようで、更に調べてみたところ、どうも「夜逃げ」に「夜跑」の意味はないと分かりましたが、私のことを思ってわざわざコメントしてくれた人の心の温かさには十分に触れることができました。

また、このアプリでは、語彙の質問をしたりそれに答えたりするだけでなく、文語文についても話し合われることがあります。「子曰く、学びて時にこれを習う、亦悦ばしからずや。朋あり、遠方より来る、亦樂しからずや。人知らずして恨みず、亦君子ならずや」という『論語』の内容を見て、文藻のない私は「うわ、すごい」という言葉しか出てきませんでした。「石の上にも三年、これから努力しなきゃ」と、気合が入りました。

周知のように、日本人は中国人より、他人に配慮する民族で、他人が困っているのを見て助けてあげたいくなるのはごく当然なことなのでしょう。しかし、私は中国人も日本人ほどの至れり尽くせりの配慮には及びませんが、外国人にはフレンドリーだと思っています。特に若者世代です。なぜなら、科学技術の発展が両国間の距離を縮めてくれたからです。アプリを通じて外国人と交流している者の大半が若者のようです。

「我还在很热 哈哈」

「『我还在很热』じゃなくて、『我依然很热』です。」

『Hello Talk』で見た会話でした。このアプリでは、他人の間違った言葉づかいを修正することができるので、多くの中国ユーザーは日本人が書いた不自然な中国語を中国人らしく直します。おそらくこの機能は人の「任侠」への憧れを掻き立てるのでしょう。

私が見た中には、一文に三十くらいのコメントがついていたこともあります。最も不思議だったことは、数十のコメントの中の八十パーセントの内容が大体同じような内容だったことです。「一文の中国語を直すだけなら、二、三人で大丈夫だよ、数十人が同じことを書く必要ある?」と思いましたが、最終的には「ほら、中国人はこれほど親切なんだよ」と結論づけました。

『Hello Talk』を使い始めてから、大勢の人に助けてもらいました。私だけでなく、多くの若者が水を得た魚のように『Hello Talk』のようなSNSをつかって遠い距離の仲間と話し合い、自分の喜びや悲しみを分かち

合いながら勉強しています。この学び合いの雰囲気は、お互いに好感を持っているからこそ作られてきたのだと思います。この好感と好意は中日友好の一つのヒントとなるはずで。

若者である我々は、普段戦争におけるドキュメンタリーを見たり、日常の中日外交のニュースを聞いたりしていますが、中日友好に対する考えはやや子供っぽいかもしれません。「中日友好についてどう考えているか。」と聞かれたら、私は「中日友好?よくわからないけど、日本人の友達がいっぱいできたよ。みんな優しい人達だよ。」と答えます。中日友好に対する考えは浅くとも、社交的な我々は毎日インターネットで海の向こうの友人と冗談を言い合ったり、世間話をしたりして、和やかな雰囲気に浸っており、毎日中日友好を自分の肌で感じています。些細なことではありますが、小さな事柄からも大きな意義は見出せるのではないのでしょうか。

「最近想吃的中国菜太多呀！」

「『太多呀』ではなくて、『太多了』ですよ。」と返事した私は、今まで通り日本人に助けられながら、日本人を助け続けたいです。

### 中日友好—若者の視点から—

惠州学院 吳嘉萍



朝、日差しが部屋いっぱいに入りこんでいて、涼しい風が吹いている。いい天気だなと思いつつ、公園へ散歩に出かけた。新鮮な空気を吸って、気持ちも清々になった。イヤホンから「嵐」の歌が流れてきた。調子に乗ってつい鼻歌を歌ってしまった。「One step 当たり前の One step 毎日だって One step 喜びも哀しみもすべて愛おしい One step あなたにただ One step 届けたくて One step」何か自分が励まされるようで、メロディーに乗って色々な考えが浮かんできた。

私にとって、日本語を学ぶモチベーションは「日本のアニメが好き」ということだけである。実は、私だけではなく、多くの中国の若者にとっても、日本といえば一番先に思い出したのはやはり「アニメ」である。それは私達が小さい頃から、日本のアニメをたくさん見ていたからである。『ドラゴンボール』とか、『ナルト』とか、『スラムダンク』とか、『ワンピース』とか数え切れないほど挙げられる。特に、ウルトラマンというキャラクターは中国で知らない人はいないといっても過言ではない。日本のアニメは私たちの生活に染み込んでいて、私達の子供時代、青春時代にも大きな影響を与えている。中学時代、私が好きなアニメは『テニスの王子様』だった。好きなキャラクターの頑張りや、自分の励みとなり、自分の身体に力を注ぐように勉強に力を注いだ。毎朝五時に起きて勉強していた。辛いと思って諦めようとする時、「アニメ」を思い出してまたがんばることができた。他の人はバカバカしいと思うかもしれないが、その時の私は「アニメ」のおかげで我慢強く、粘ることができた。

日本は「アニメ大国」として漫画やアニメやゲームが発達している。日本だけでなく、中国においてもアニメファンもたくさんいる。彼らは日本のアニメを通して日本を知り、だんだん日本に好感を持つようになった。日本の学生と交流して、共に「夏目友人帳」が一番好きだということを知って盛り上がるというサプライズもあった。共通の趣味があれば、心の距離感もすぐ縮まるようになった。この共感こそ中日友好交流の要因だと思う。色眼鏡を取って、相手のことを自分の友達として付き合うなら、きっとうまく付き合うことができるだろう。

若者であれ、年寄りであれ、男性であれ、女性であれ、互いに先入観によって人を見るべきではない。何人であるかよりも大切なことがあるはずだ。「魚心あれば水心」の言うように、自分が善意を表したら、相手も善意を受ける。我々の若者としても、社会や自分の観念に制約されないで、相手のことを理解し合いたい。これはかなり時間がかかるかもしれないが、きっとできると私は信じている。

イヤホンから歌は続いて流れてくる。「幸せって何なの 笑顔あふれること Everybody 手を叩け Clap Oh Yeah! Clap All right My friend 何が起こったの 涙ふきなよ Let me hear you say いっせいのせい Hey! 心配ないや」大きな国同士はなかなか難しいかもしれないが、小さな個人個人の中日友好は簡単にできることだ。笑顔を湛えて、誠を尽くして交流すれば十分だと私は思う。